

研究報告

イタリアの旅と映像
——1900 年代初頭のボローニャ都市計画——

井 上 典 子

Il viaggio in Italia attraverso il cinema :
l'urbanistica a Bologna agli inizi del '900

Noriko INOUE

要 約

本稿は、ボローニャ大学等の研究者と実施した都市イメージに関する研究において用いられた映像資料についての報告である。

キーワード：ボローニャ、都市計画、映像資料、グランドツアー、イタリア

はじめに

本稿は、ボローニャ大学等と実施した都市イメージに関する研究において用いられた各種資料の中から、ボローニャ映像センター（Cineteca di Bologna）の編集による1910年代の映像資料と未公開の複数の映像を参考に、国家統一期におけるボローニャの都市計画について考察するものである⁽¹⁾。北イタリア諸都市は1800年代半ばから1900年代初頭にかけて新たな都市のあり方を模索した。市街地に積層する古い建造物群が市壁とともに解体されていく一方で、モニュメントの修復、広場および街路のネットワーク化、スカイラインの強調等が進められた。こうした都市計画は、市街地に新たな都市空間を生み出すとともに、産業都市や大学都市等としての都市のイメージを形作った。ボローニャも、国家統一期に大きく変容した都市の一つである。ボローニャ映像センターの資料はイタリアの多くの都市を映し出し、それぞれが興味深いものではあるが、本稿は未公開映像には言及していない。

グランドツアーとイタリアの風景

ボローニャ映像センターが編集した『グランドツアー・イタリアーノ（Grand Tour Italiano）』（2016）は、イタリア諸地域を対象に1895年から1914年の間に作成されたと考えられる無声の映像を選別し、これらをまとめた映像集である⁽²⁾。グランドツアーとは、イギリス貴族の子弟等がイタリアの文化を学習するために実践した18世紀末をピークとするイタリアへの旅を指す。人、自然、遺跡、美術を軸に、絵画資料の観点からグランドツアーを語る岡田（2010）は、多様な知識の交流と葛藤を生み出したこの旅が、18世紀の特徴的な文化現象という枠を超え、「ヨーロッパ」という一つの意識形成において重要な役割を果たしたと指摘している⁽³⁾。

一方、アッティリオ・ブリッリ（Attilio Brilli）は、ルネッサンス以後、多様な立場の人々によって実践されたイタリアの旅、あるいはその経緯で生まれた様々な記述を詳細な資料に基づいて論じたものである。これによれば、グランドツアーの旅程はイタリアの天候や各地の催しに合わせて検討され、8ヶ月から1年あまりを費やした旅の中では、ジェノヴァ、ルッカ、ピサを通過してローマに入るルートと、ボローニャ、フィレンツェ、シエナを通るルートの二つが好んで用いられた⁽⁴⁾。フィレンツェからローマに至る道筋には丘陵地が広がり、そこではトスカーナの絵画的な風景が鑑賞された。中でもシエナとその周辺の農村部には、フランチージェナ街道をはじめとする巡礼の道等が交差し、そこでは数多くの記述が生み出されることとなった⁽⁵⁾。Brilli（2006）は、これらの記述を通じてトスカーナの農村風景は、徐々に神話化されていったとしている⁽⁶⁾。イタリアの著名な地理学者ベルナルド・セッキ（Bernardo Secchi）もシエナを、多くのイメージを誘発してきた都市として位置づけている。Secchi（2011）によれば、この都市に集積

する多様な有形の要素と都市空間に対する個々人の認識およびその記述は複層して絡み合い、シエナに「中世都市」としてのイメージを与えた⁽⁷⁾。しかし、この強い都市イメージは、歴史地区の再利用と建造物修復を用いた中世的イメージの再生産という手法を、都市行政に不可避免的に位置づける結果となった。Secchi (2011) は、こうした観点から、シエナは明らかに現代都市政策の結果であると指摘している。

トスカーナの農村風景として一般に共有されるイメージは、森林、河川、農地等とともに、数々の小都市群と点在する修道院や庭園によって構成されている。呪術的な対象として扱われてきた森林等の自然は、1800 年代になると、それ以前とは全く異なる観点から鑑賞の対象となった。すなわち、眺望美である⁽⁸⁾。都市表象、景観を専門としたジャンカルロ・パーバ (Giancarlo Paba) は、トスカーナ地域の農村風景を、美的な意図に基づき計画的に構成された風景であると位置づけている⁽⁹⁾。Paba (1998) は、日本の「借景 (shakkei)」とトスカーナの「アッパリータ (apparita)」⁽¹⁰⁾、すなわち、美しい農村景観が唐突に視野に飛び込む眺望点とこれを生み出す造園の技術について論じる中で、いわゆる借景が「見える事物の階層秩序化」(Paba 1998: 21) を通じて「記号化された仕方であらかじめ設定された」(Paba 1998: 21) 風景構築の手法であるのに対し、トスカーナ地域では農地や庭園、邸宅等は「視覚的な統一性のみならず、物質的な存在としても統一的なもの」(Paba 1998: 21) として、土地の管理や農林業等の地域経済の構造に深くかわる概念であったと位置づけている。シエナ等の周辺に広がる丘陵地の森や農地を対象に、財産管理を目的として整然と秩序づけられた土地利用は、眺望という行為を通じて美的鑑賞の対象となり、グランドツアーの記述によって現在につながる一つの観光地として展開することとなった⁽¹⁰⁾。

映像と都市

1910 年から第一次世界大戦終結期にイタリアの映像産業はピークを迎え、無声の映像は世界市場に送り出された。今回、映像集を編集したアンドレア・メネゲッリ (Andrea Meneghelli) は、無声の映像を映像史にどのように位置づけるかについては専門的な議論を待たねばならないとしながらも、文化人によるグランドツアーが一般的なイタリア観光へと転換されていく中で、これらが果たした一定の役割を強調している⁽¹¹⁾。文学や絵画の主題とされたイタリアの「美しさ」は 20 世紀初頭においてもその評価を維持していたため、映し出されたイタリア諸都市のイメージは多くの人々によって消費され、イタリアへの旅の要望を人々の間に増幅させたと考えられる。こうした動きはイタリア観光の大衆化を促し、ミラノの企業家を中心に観光を目的としたクラブが設立されるなど、旅行者に対する情報提供等が活発化した⁽¹²⁾。中でも自転車による旅は好まれ、専用道路の建設が提案されるとともに、整備用機器や救急搬送等のシステムも充実していった⁽¹³⁾。

こうしたイタリアへの旅の対象には、都市遺構の見学が含まれていたと考えられる。国家統一期以後には、近代的な都市空間の構成や産業の発展は賞賛の対象となった。映像集に収録されるトリノは、華やかな王宮前の広場や植物園、郊外の風景等とともに自動車産業の萌芽を大きくとりあげている。一方で、カミッロ・ボイト（Camillo Boito）やグスターヴォ・ジョヴァンノーニ（Gustavo Giovannoni）等は、古い都市と新しい建築を機能的にも美的にも融合する理論を構築し⁽¹⁴⁾、これらの理論に基づき、古い都市を完全に更新するのではなく、過去の遺構に配慮しながら古い街区を改造する様々な試みがイタリア諸都市で実践された。ボローニャも、こうした都市の一つとして理解することができる。

1900年代初頭のボローニャ

ポー川の広大な農業地帯を背景に、比較的緩やかな産業化を経験した地方都市ボローニャの映像には、トリノのような華やかさはない。そこには市壁が解体された後に残されたいくつかの門や歴史的建造物、街並みの一部が映し出されており、近代的な都市政策の成果を容易に認識することはできない。ここでは、『グランドツアー・イタリアーノ』の映像の中から、ガッリエラ門とその周辺の建造物を取り上げ、実践された都市計画について考察する。

ボローニャにおけるいわゆる近代的な都市政策は、1850年代末に始まる鉄道敷設を契機としている。1889年から1929年のボローニャの都市政策史をまとめたピエール・パオラ・ペンゾ（Pier Paola Penzo）によれば、新しい都市の形成は、都市衛生の改善や都市美に立脚するとともに、強い郷土意識の下で自治的な都市政策によって推進された⁽¹⁵⁾。1800年代の半ばには、ボローニャ駅を核に、駅とその南側に広がる市街地を結ぶ新たな街路の建設が計画され、駅前広場の整備や、市壁北部では産業地区の開発が検討された。1880年には馬車鉄道が、1904年には最初の市内電車の運行が開始し⁽¹⁶⁾、街路の拡幅や直線化が進められるとともに衛生管理等の観点から街区の改善も行われた。この駅前広場の整備とは、ガッリエラ広場計画である。

ガッリエラ広場は、ガッリエラ要塞が位置していた場所にある。ガッリエラ要塞とは、ボローニャの統治を意図したフランスの枢機卿により1300年代に建設されたといわれるが、自治政府を構成していたボローニャ市民はこれを破壊し、その後、数回再建されたものの、その都度市民によって破壊された⁽¹⁷⁾。市壁が建設されると、フェッラーラへとつながるガッリエラ街道のボローニャ側始点としてガッリエラ門が開かれた。国家統一期の都市政策において、ボローニャの自治を表す象徴的ともいえる場所に位置するこの広場は、ボローニャ駅、北部産業地区、市街地中心部の三つの拠点をつなぐ重要な結節点としての役割を担うようになった。Penzo（2009）は、駅前広場建設の最初の計画は、1859年から1888年の間に実施されたと指摘しており⁽¹⁸⁾、したがって、1910年代の映像が映し出すガッリエラ門とその周辺の建造物は、1902年の市壁解体を経て、駅前広場から北部へ向かう道路の整備等が行われていた時期の状況を示すものであると考

えられる。

ガッリエラ広場は、隣接するモンタニョーラ公園と階段で接続された。モンタニョーラ公園の前身となる都市緑地は既存のものであるが、この時期に噴水や幾何学的な整形地割が整備され公園としての形が整えられた。また、階段の意匠と構造には、コンクリート工法を用いた数多くの建築、土木構造物の設計者として知られるアッティエリオ・ムッジャ（Attilio Muggia）がかかわった⁽¹⁹⁾。計画時には市壁の解体が予定されていたため、この美しい階段は、駅から市内に入る人々の視線を集める一つのモニュメントとして認識されるはずであった⁽²⁰⁾。しかし実際には、駅前には建物が新築され、人々の視線は遮断される結果となった。

既存建造物の解体、モニュメントとしてのガッリエラ門と階段、都市緑地としてのモンタニョーラ公園等がガッリエラ広場と連結することによって、この広場は公共空間としての広がりを獲得し、新しい駅前広場として再編された。映像に確認される劇場（Arena del Sole）は、1800年代初頭にはすでに整備されていたものであるが、広場の整備とともに都市の娯楽を目的としたエデン劇場等が隣接地に建設され、ガッリエラ広場を中心とする一画は社会生活の舞台としても成長していった。

水路システムの映像と都市生活

ガッリエラ広場は、この映像から15年あまりが経過した1927年に再度改造され、この際、広場に残存していた水路は暗渠となった。現在、ガッリエラ広場は環状道路に面するとともに、周辺建物の多くはホテルとなっている。都市構造自体は1900年代初頭から大きくは変化していないものの、広場の社会的交流の場としての役割は減少し、高速鉄道やバス発着所等を伴う北イタリアの主要交通拠点へと移行した。継続的な都市整備の経緯で、広場の東西地区に数多くみられた水路は暗渠化されて街路網へと変わったため、ボローニャの都市イメージを構成する重要な要素の一つであった水路システムと都市生活との関係も失われた。現状では、市街地の中で水のある都市景観を確認できる箇所は限られているが、映像は失われる直前のその姿を捉えている。

水とボローニャとの関係は、多くの文献や地籍図、写真等を通じて示されている。その中で水路との関係において特徴的な形態を持つ建造物、建物間に設置された橋や水車等とともに、都市空間において活発に営まれていた製造業の実態が明らかにされている⁽²¹⁾。都市機能の充実や衛生面の改善という観点から都市の特徴が徐々に整理されていく中で、撮影者が都市内の水路を捉えた理由は明らかではない。水を用いた都市産業への視点、建造物と水路による複合的な都市構造への視点、カナルに対する観光視点など様々な着眼点を想定することができる。いずれにしても、1900年代初頭の多くの映像が都市や自然の美的側面を描く意図を持つと考えられる中で、ボローニャの映像が市街地を流れる水路とそれを利用する人々を映し出している点は特徴的である。水路システムと都市生活の生み出す様態が、ボローニャの都市イメージを構成する主要な要

素の一つであったことをこの映像から推測することができる。

1920年代のボローニャ都市イメージ

ボローニャ映像センター所長のジャン・ルーカ・ファリネッリ (Gian Luca Farinelli) は、『グランドツアー・イタリアーノ』の導入部において、イタリアの映画産業がファシズムの記憶に深く結びついていることを指摘している⁽²²⁾。イタリア国立映画実験センター (Centro Sperimentale di Cinematografia)、ヴェネツィア・ヴィエンナーレ (Biennale di Venezia)、チネチッタ (Cinecittà)、教育映画連盟 (Istituto Luce: L'unione Cinematografica Educativa) 等はこの政権下で強化され、ニュース映画等の作成を通じて政権イメージの形成に深く関わったとされる。本稿では、1910年代の映像と都市イメージについて考察したが、Penzo (2009) が指摘するように、1920年代以後、ボローニャの都市政策はファシズムによる強い影響を受けるようになる⁽²³⁾。その都市政策は、具体的な形で公共施設建造物の意匠等に反映された。ボローニャは、レジスタンスとの関係を強調した都市イメージを通じて広く知られるが、実際にはファシズムとの関係において残したイメージも強く、これらは映像に確認される。今後の調査課題の一つである。

注

- (1) 特色ある研究奨励費による。
- (2) Meneghelli, A. (ed.) (2016). *Grand Tour Italiano, 61 Film di primi anni del '900*. Bologna: Eidizioni Cineteca di Bologna.
- (3) 岡田温司 (2010) 『グランドツアー 18世紀イタリアへの旅』 岩波書店。
- (4) Brilli, A. (2006). *Il Viaggio in Italia: Storia di una grande tradizione culturale*. Bologna: il Mulino, p.214.
- (5) <http://www.librari.beniculturali.it/it/notizie/notizia/i-siti-relativi-alla-Via-Francigena/> (イタリア文化活動観光省 20200204 確認)
- (6) Brilli (2006), pp.236-240.
- (7) Secchi, B. (2005). *La città del ventesimo secolo*. Roma-Bari: Editori Laterza, pp.54-62.
- (8) Brilli (2006), pp.236-237.
- (9) Paba, G. (1990). "Pesaggio occidentale orientale," in Donatini, D., Massa, M., Paba, G., Ventura, P. (eds.) *Studi sulla città e sul paesaggio*. Atti IRTU 89-90. Firenze: Alena Editore, pp.26-28 (=ジャン・カルロ・パーバ (1998) 「西洋と東洋の景観」 福井憲彦訳, 季刊『iichiko』no.47. 20-23 頁)
- (10) Brilli (2006), p.240.
- (11) Meneghelli, A. (2016), p.13.
- (12) ツーリング・クラブ・イタリアーノ (Touring Club Italiano) はその一つである。
- (13) <https://www.touringclub.it> (20200124 確認)
- (14) 横手義洋 (2004) 「グスターヴォ・ジョヴァンノーニの都市保全論について」 日本建築学会『日本建築学会学術講演梗概集 建築・歴史・意匠』; Zucconi, G. (2002). "Un manuale mancato: Gustavo Giovannoni, Vecchie città ed edilizia nuova, 1931," in Di Biagi, P. (ed.) *I Classici dell'Urbanistica Moderna*. Roma: Donzelli Editore, pp.59-60.
- (15) Penzo, P. P. (2009). *L'urbanistica impompata: Bologna dall'età liberale al fascismo (1889-1929)*. Bologna: Clueb, p.49.

- (16) Bernabei, G. *et al* (eds.) (1984). *Bologna moderna 1860-1980*. Bologna : Patron, p.44.
- (18) Penzo (2009), p.19.
- (19) Lipparini, P. (2001). “Ingegneri-Architettura. La conciliazione improbabile di Attilio Muggia, in Gresleri, G., Massaretti, P. G. (eds.) (2001). *Norma e arbitrio : Architetti e ingegneri a Bologna 1850-1950*. Bologna : Marsilio, pp.163-173.
- (20) Penzo (2009), p.31.
- (22) Farinelli G. L. (2016). “Presentazione,” in Meneghelli, A. (ed.) *Grand Tour Italiano, 61 Film dei primi anni del '900*. Bologna : Edizioni Cineteca di Bologna, p.4.
- (23) Penzo (2009), pp.7-8 ; 北原敦 (2002) 『イタリア現代史研究』 岩波書店, pp.148-149.

参考・引用文献

- 岡田温司 (2010) 『グランドツアー 18 世紀イタリアへの旅』 岩波書店.
- 北原敦 (2002) 『イタリア現代史研究』 岩波書店.
- 北村暁夫・小谷眞男編 (2010) 『イタリア国民国家の形成－自由主義期の国家と社会』 日本経済評論社.
- 齊藤寛海・山辺規子・藤内哲也編 (2008) 『イタリア都市社会史入門－12 世紀から 16 世紀まで』 昭和堂.
- ジョルジョ・チウッチ (2014) 『建築家とファシズム－イタリアの建築と都市 1922-1944』 鹿島出版会.
- 藤澤房俊 (2001) 『第三のローマ－イタリア統一からファシズムまで』 新書館, 2001.
- ジャン・カルロ・パーバ (1998) 「西洋と東洋の景観」 福井憲彦訳, 季刊『iichiko』 no.47. 10-28 頁
- 横手義洋 (2004) 「グスターヴォ・ジョヴァンノニの都市保全論について」 日本建築学会『日本建築学会学術講演梗概集 建築・歴史・意匠』
- Bernabei, G., Gresleri, G., Zagnoni, S. (1984). *Bologna Moderna 1860-1980*. Bologna : Patron.
- Bonetti, M. F. (2010). “The Image of Rome : The Authors, the Places and the Models of Representation,” in *Rome 1840-1870 : Travelogues and Photography*. Kyoto : The National Museum of Modern Art.
- Brilli, A. (2006). *Il Viaggio in Italia : Storia di una grande tradizione culturale*. Bologna : il Mulino.
- D'Ajutolo, F. (2002). *Album fotografico di un bolognese*. Bologna : Pendragon.
- Farinelli, G. L. (2016). “Presentazione,” in Meneghelli, A. (ed.) *Grand Tour Italiano : 61 film dei primi anni del '900*, 4-5. Bologna : Edizioni Cineteca di Bologna.
- Gentile, E. (2007). *Fascismo di pietra*, Roma-Bari : Editori Laterza.
- Lipparini, P. (2001). “Ingegneria-Architettura : La conciliazione improbabile di Attilio Muggia,” in Gresleri, G., Massaretti, P. G. (eds.) *Norma e arbitrio : Architetti e ingegneri a Bologna 1850-1950*, 163-173. Venezia : Marsilio.
- Meneghelli, A. (2016). “Una vaglia piena di vision,” in Meneghelli, A. (ed.) *Grand Tour Italiano, 61 Film dei primi anni del '900*, 6-17. Bologna : Edizioni Cineteca di Bologna.
- Paba, G. (1990). “Pesaggio occidentale orientale,” in Donatini, D., Massa, M., Paba, G., Ventura, P. (eds.) *Studi sulla città e sul paesaggio*. Atti IRTU 89-90, 18-35. Firenze : Alena Editore.
- Penzo, P. P. (2000). *La città italiana prima dell'Unità : Milano, Torino, Genova (1700-1861)*. Bologna : Clueb
- Penzo P. P. (2009). *L'urbanistica incompiuta : Bologna dall'età liberale al fascismo (1889-1929)*. Bologna : Clueb.
- Poli, M. (ed.) (2005). *Le Acque a Bologna : Antologia*. Bologna : Editrice Compositori.
- Secchi, B. (2005). *La città del ventesimo secolo*. Roma-Bari : Editori Laterza.
- Spagnesi, P. (2005). “Storicità di Gustavo Giovannoni e del suo ‘diradamento edilizio’” in Sette, M. P. (ed.) *Gustavo Giovannoni : Riflessioni agli Albori del XXI Secolo*, 41-56. Roma : Bonsignori Editore.
- Zucconi, G. (2002). “Un manuale mancato : Gustavo Giovannoni, Vecchie città ed edilizia nuova, 1931,” in Di Biagi, P. (ed.) *I Classici dell'Urbanistica Moderna*, 55-66. Roma : Donzelli Editore.

2020 年 2 月 4 日受理